

3 K 雑感

江藤 功

(北九州市消防局長)

3Kという言葉をよく耳にする。ひとつは若者たちが職業を選択する基準として、「きつい、きたない、危険」な職業を回避し、企業の人事担当者を悩ませているらしい。また、女性が結婚相手の理想像として、「高学歴、高収入、高身長」をあげ男性を困らせているとのことである。いずれも、若者たちの感性やイメージの領域であろうし、一過性の流行語の感がする。

しかし、同じ3Kでも「高齢化、高度情報化、国際化」となれば、まったく趣が違った言葉となってくる。社会の変化、時代の流れとして、社会生活に大きくかかわってきているこれら3Kに対応するため、あらゆる分野で英知を集め、歩を進めている現状であり、わが消防でも重要な課題として鋭意取り組んでいる。その中でも、特に「高齢化社会」にどう対応するかは、人命の安全と保護を組織目標としている消防にとって大きな命題であると考え。

最近、平成2年の国勢調査結果の速報が発表された。それによると、わが国の高齢化率（総人口に占める65歳以上の人口割合）が12%に達した。そして厚生省人口問題研究所の推計によれば、2010年には20%、2021年には23.6%に達するといわれ、欧米諸国に比べ高齢化のスピードは極めて速く、かつて経験したことのない社会現象に直面しつつある。

高齢化を消防的見地で見ると、「心身機能の弱まり」→「火災発生を未然に防ぐ防御力の低下」→「出火危険・火災拡大危険・避難危険の増大」となり、火災による死者が急増して成人の5～10倍になると、本誌No.24（1991年春）で京都府立大学水野弘之助教授が指摘されている。また同様に、最近では高齢者の救急需要の増加という現実にも直面している。

人間は歳をとり、やがて老を迎えることは、動かし難い事実であることを考えるとき、長生き現象を喜ぶべきと同時に、これからの消防行政の重要性をあらためて実感しているところである。

従って、このような背景のなか、現在「住宅防火対策」「救急高度化事業」など高齢化社会を見据えた施策を推進しているところであるが、これら消防対策を考えるとき、単発的な事業の展開では到底対応できるものではなく、総合化（インテグレーション）の考えが是非必要と考える。また、実施計画には、ただ単に「安全」というよりも、「安心」という「心」を含んだものが必要とされてくる。即ち、セフティからセキュリティへの移行が大切と考える。

いずれにしても、我々の使命は、現状対策として「何をしなければならないか」、そして21世紀を展望して「今、何をしておかなければならないか」をテーマに着々と確実に手を打たなければならない時期であると、高齢者の仲間入りを身近に感じている者として痛感するこの頃である。